

本間一夫著

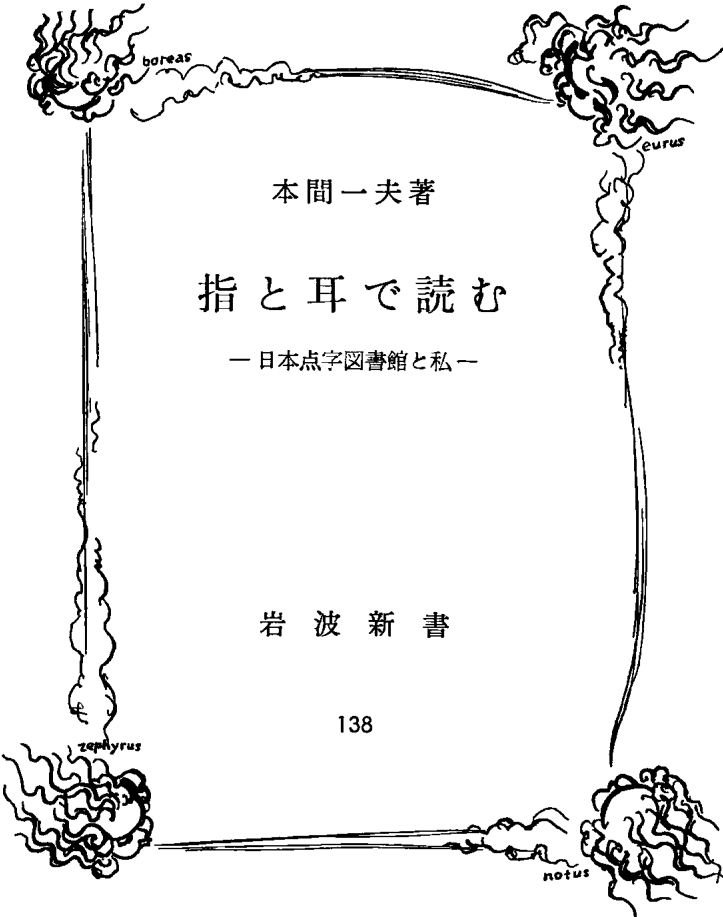
指と耳で読む

— 日本点字図書館と私 —



岩波新書

138



本間一夫著

指と耳で読む

— 日本点字図書館と私 —

岩波新書

138

本間一夫

1915年北海道に生れる

1939年関西学院大学専門部英文科卒業

現在—社会福祉法人日本点字図書館長

受賞—朝日社会奉仕賞(1953年)

吉川英治文化賞(1977年)

著書—「欧米の盲人福祉をたずねて」(共著)

「点訳のしおり」

指と耳で読む

岩波新書(黄版) 138

1980年11月20日 第1刷発行 ©

定価 380 円

著 者 ほん ま かず お
 本 間 一 夫

発 行 者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

発 行 所 岩 波 書 店

電話 03-265-4111

振替 東京 6-26240

印刷・理想社 製本・永井製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

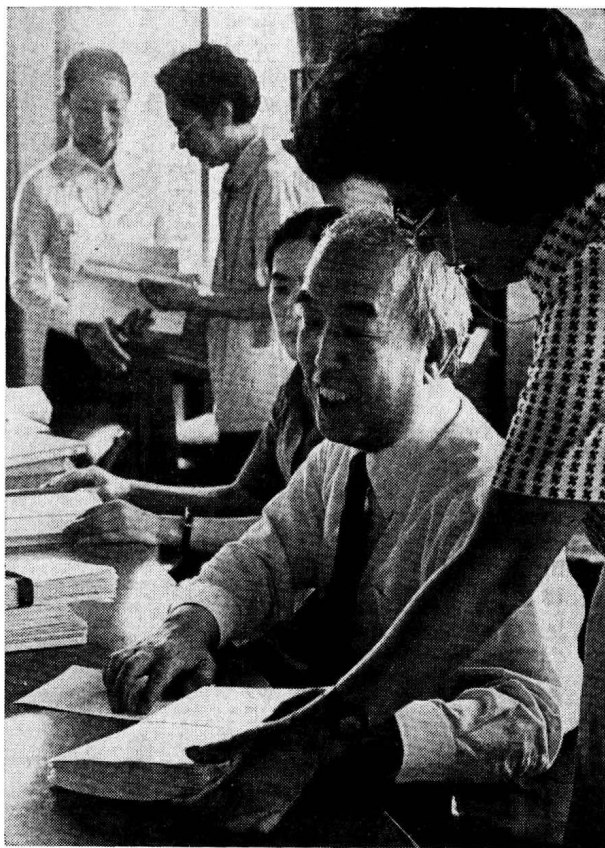
目次

I	私と点字図書館	一
一	失明——運命の日	二
1	出生から失明まで	二
2	医療を求めて	七
二	点字との出会い	九
1	函館盲啞院に学ぶ	九
2	ライフ・ワークへの決意	二六
三	青春の曠野	三五
1	関西学院英文科へ	三五
2	盲人福祉への挑戦	四四

四	点字図書館の創立		五
1	ささやかな出発		五
2	咲ききらなかった蕾		六
3	戦火を逃れて		七
五	苦難の中の再建		八
1	戦後の再出発		八
2	明暗二道の交差点		九
3	委託事業からの前進		一〇
六	点字から録音テープへ		一
1	テープ・ライブラリーの誕生		一
2	苦勞した募金行脚		二
3	指読から聴読への拡大		三
七	盲人文化のささえ		三
1	コンクールと感謝の集い		三

2	世界盲人福祉會議と盲人用具	一四四
	職員宛の海外通信から	一五三
3	善意と奉仕の人びと	一六四
八	失明の壁をこえて	一七四
1	責任を持つ関連事業	一七四
2	海外旅行の印象	一八五
3	失明の壁をこえて	一九三
II	体験の中から訴える	一九七
1	盲人の読書	一九八
2	図書製作の実情	二〇〇
3	これからの日本点字図書館	二〇六
4	あなたへのお願い	二〇八
	あとがき	二二一

I 私と点字図書館



点訳奉仕者と語り合う著者(昭和52年)

一 失明——運命の日

1 出生から失明まで

私は、昭和十五年の十一月十日にこの日本点字図書館を創立しましたので、今年でちょうど四十年になります。この間私は、この点字図書館経営という一筋の道を、大勢の方々のご協力をいただきながら、まあまあ順調に歩んでまいりました。しかし今日までの過去をふり返ってみると、やはりいろいろなことがありました。よくここまでやってこられたものだ、というのが率直な思いです。

私は北海道の西海岸、小樽よりもずっと北の、日本海に面した増毛^{ましげ}という小さな漁師町に、大正四年（一九一五）十月七日に生まれました。この増毛という町は江戸時代の早くに開け、明治のころには、もうニシンの漁場として、なかなかにぎわっていたようです。

私の祖父は、新潟県の佐渡ヶ島から、明治もまだ十年代に北海道に渡ってきて、ここに住みつきました。最初は小間物を小樽から山越えで背負ってきて、小店を開いていたようですが、やがてつくり酒屋をはじめ、ニシンの網元などにもなって、私の生れたころは、なかなか手広く仕事をしておりました。横座と言われていた茶の間の炉辺ろべから、すっと立ちあがる背の高いやせぎすの姿が、その後まもなく見えなくなった私の眼の底に、今もはっきりと残っています。

その祖父には、二男一女がありました。その一人娘に小樽から婿をとり、私が生れたわけです。ところが私の母は、それからまもなく粟粒性の肺結核にかかり、いろいろ手を尽くしたのですが、最後には茅ヶ崎ちがさきの高田たかた駢へん安博士こうあんの南湖院（結核療養所）で、私が生れて一年ちよつとの大正五年十二月十九日に亡くなりました。そんなわけで、私には母の記憶はまったくないので、だが、今でも湘南のあのあたりへ行って波の音をききますと、母もこの波の音をききながら、遠い北海道においてきた赤ん坊を思い出していたのではあるまいかなど、一瞬感傷にふけることがあります。

ところで実は、父が胸の病を持っていたのをかくして縁付いて来たことが後でわかり、その病気が母に移ったと考えられたのです。事実そうだったのかも知れません。そこでワンマ

ン祖父が大いに怒って、即刻父は離縁され、実家に帰されてしまいました。その結果、私は子供のなかった伯父に当る長男夫婦に引取られ、育てられることになりました。養父もたいへんやさしい良い人でしたが、特に養母が自分の子として至れり尽くせりの面倒をみてくれましたので、私はこのような複雑な家庭の事情をまったく知らずに、十九歳まですごしたのです。それゆえこの稿も、これからは、この養母を母と呼んで進めたいと思います。

こんなわけで、私は健全な体を持ち、たいへん幸せな境遇の中で幼児期をすごしたのですが、五歳の年の暮ちかく、思わぬ運命の変転がやってきたのです。それが失明でありました。

忘れもしません、大正九年十二月十二日、「ジョウバ」といっていた板切れを持ち、外で雪遊びをしていた私は、急に頭が痛み出し、茶の間にもどってストーブのそばで、ゴロリと横になりました。それがおそろしい脳膜炎の最初だったのです。やがて熱はさがり、食欲も出てきたのですが、どうも眼がおかしいということに、まわりの者が気づいたのです。床の上に起きなおって、好きな積木遊びをはじめたのですが、その積木の色のぬってある方も、ない方も、ごちゃまぜに積みかさねていたのです。暗いからだろうと、頭の真上の電灯を引きおろしたり、雪を払って雨戸をあけたりしてくれましたのですが、少しもよくなりません。「眼が

おかしいのではないか」と、周囲は大きなわざになりまして。

町の医者ではとても心もとないと言うのですが、そのころ増毛は、電灯がついてまだ三、四年目で、汽車は留萌るもいという隣り町までしか来ておらず、そこまでの二十キロ近くを、馬ぞりに乗せて病人をはこぶわけにはいかない。それでたまたま近くにいた百何トンかの持船を呼びよせて、両親やばあやと一緒に、大あわてでこれに乗り、岬をまわり冬の荒海を渡って小樽に出ました。この時に見た増毛が、私が自分で見たふる里の最後の姿でありました。

さてここであつと、失明について説明を加えますと、失明者の中には、生れつきの者がいます。この人々の中には、色や形はもちろん、見えるという観念それ自体さえない人が、決して少なくありません。これは「先天盲」と呼ばれる人たちですが、私の場合は、生れてから五年間はまったく健全な眼をもっていたわけですから、いろいろな物の形や主だった色など、この見えた時代の記憶が、ずいぶんたくさん残っています。

たとえば、夜、家の前の坂道を、母に手を引かれてのぼって行きながら空をあおぐと、非常にたくさん星が、美しくまたいたっている。「きれいだねえ、星っていくつあるの？」と母にきいたり、それからまたある夕方、丘の上の灯台まで、細い道をのぼりつめてふり返ると、真赤な夕陽が、海の向うに沈んでゆくのが見えました。

失明する年の夏のことです。もう一人の伯父が、佐渡から伯母をめとることになり、両親がそれを迎えに行くといふので、私もつれられて、長い旅をしました。その時東京へ寄り、上野動物園に行き、オリに入っている大きな二頭の象を見ました。小さい私がその前に立って仰ぎ見ると、象はたえず体をグラリグラリ左右に動かしていました。

また汽車の窓からみた風景も、いろいろ眼底に残っています。どこであつたか、松林のなかに、牛が点々と遊んでいたとか、飛行機が頭の上を、汽車とは直角に飛んで行ったとか、そうした場面をはっきり記憶しています。

それからもう一つ、強い印象を受けた一枚の絵があります。竜淵寺りゅうえんじという檀那寺だんなでらで、お盆の時に見た「地獄絵」です。ウソをついたやせた男が、釘ぬきで舌を引っばられていたり、ハダシの女たちが、針の山に追いあげられていたり、火の燃えさかる車を引かされている男たちが描かれていました。

十何年か前になりますが、その寺に行ったので、その掛軸を出してもらい、「このあたりにこんな場面があるでしょう」と指さしますと、ピッタリ当てていました。恐ろしかった印象が、子供心にどんなに深くきざまれていたかの実証です。この絵によって、善と悪、この世とあの世などのことを、はじめて考えさせられたのだと思います。

眼でみた場面の記憶は、他にもまだ数多く残っておりますが、ただ人の顔の記憶がほとんどないのは、どうしてなのでしょう。自分にもわかりません。ともあれ、光と闇という観念さえ持っていない先天盲の人たちにくらべれば、私などはまだ幸せの方ではないでしょうか。

2 医療を求めて

小樽では、稲穂町の鎌倉病院という大きな私立病院に入院しました。しかしそのころから、私の感覚の世界からは光がだんだん失われ、音だけの聴覚を主とする世界に入ってゆくことになるのです。病室のベッドに横になったまま、もうだいぶ元氣になっていましたので、その頃流行の商船学校の校歌、「霞める空に消えのこる——」というのを、意味もわからず大声でうたったり、窓の外からきこえてくる、いろいろな物売りの声にきき入ったりしました。

夜おそくには、「おいなりさあーん」と語尾を低く長くひくお爺さんの声、朝早くには「ナットウ、ナットウ」と寒空にひびくいたいけな少年の金切声をききました。子供心にも、「かわいそうだなあ」と思ったのでしょう、その後も時々あの少年のことを思い出し、大きくなつて幸せになつたろうかなど、案じたものであります。

そんなわけで、私は小学校へは行かずじまいになりました。しかし失明前、すでに片かなだけは読み書きができましたし、港を出入りしている船の絵をよく描きました。絵本も何冊か大切に持っていました。

本を読んでもらう習慣は、この小樽時代から始まりました。そのころ鈴木三重吉編集の「世界童話集」という、薄手ですが表紙の厚い立派なシリーズが出ていました。病院の近くに、「左文字」という大きな書店があつて、両親はそこから買ってきて読んでくれました。「海のお宮」、「七面鳥の踊り」、「黒い小鳥」等二十冊くらいはそろえました。このシリーズは、日本ものよりも西洋の話が多く、私はよくその内容を記憶していました。ずっと後のことです。小さな従兄弟たちと話してきかせ、大好評を博しました。

鎌倉院長とは古くから家族ぐるみのおつきあいでしたから、よく手を尽くして治療してくださったので、体はすっかり回復しましたが、肝心の視力は少しも戻りません。これでは駄目だということで、私の眼の治療のため、両親は家業をいっさい祖父にまかせ、私をつれて上京することになりました。

こうして一家が上京したのは、大正十年四月でしたが、それが何日であつたかは、誰もお

ぼえておりませんでした。途中、汽車が水戸駅を通過したとき、駅前の大きな旅館街がさかんに燃えており、高い所から看板がすさまじく焼け落ちたりしていたそうです。最近、知人に調べてもらいますと、それは四月十二日の未明であることがわかりました。五十九年ぶりに、私の上京日が、火事のおかげで判明したというわけです。

東京での治療生活は、まる二年にわたりました。最初三、四ヵ月は、日本橋のたもとの旅館暮しでしたが、その後は中野の沼袋に一軒家を借りました。そして九段の坂上にあった、帝大眼科部長の河本重次郎先生に、一所懸命通いつづけました。初め日本橋からは母の膝にのせられ人力車で、中野からは今の国電——そのころは「省線」と言っていました——に乗って、今はなくなりましたが、市ヶ谷と飯田橋の間にあった牛込駅で下車し、坂をのぼって行ったものです。今でも四谷駅近くのトンネルを通ると、そのころのことを思い出します。

河本先生は、眼科では日本の第一人者でした。わが子を失明させてしまうかどうかは、それこそ一家の一大事ですから、その頃失明した友人たちの親御さんは、皆この先生のところへ連れて行ったものです。「ああ、あなたも河本先生にかかったのですか」と話し合うことが、今でもよくあります。初めはむろん毎日通ったのですが、だんだん一日おき二日おきになり、ついには一週間に一度くればよい、と言われました。

治療の方法としては、ただマブタをひらいて目薬をさす、というだけなのです。両親も心細くなったか、名医ときけばずいぶん、あちこちに連れて行ってくれました。埼玉県の秩父まで行って、有名な落合先生にも診てもらいました。どの先生も、「体が大きくなって、しっかりしてくれば良くなるよ」などと言います。しかし慶応病院の菅沼博士だけは、「この眼はもうなおらない」とはっきりおっしゃったそうです。しかしそこは親心で、あきらめ切れず、「あの医者だめだ」と言っていました。やはりそれが本当だったわけです。

大人になってから失明した人の場合は特にそうなのですが、眼科医がいつどんな形で、「この眼はもうダメだ」と宣告するかは、非常にづらいまたむずかしい問題で、昔も今も変りないようです。私の場合は、ずっと後になり函館の盲啞院に入ってから、北海道大学の越智先生に診てもらいましたし、関西学院に入ってからさえも、伯母にすすめられて、新潟医大の熊谷先生の診察を受けました。越智先生は、「点字新聞が出ているほどなのだから、そのまま勉強を続けなさい」とおだやかに話して下さいましたが、それは婉曲の失明宣告だったのかも知れません。

そのころ東京には、よく地震がありました。一度あるとすぐ後に、「ゆり返し」といって、またもっと大きなのが来ます。北海道には地震がまったくなかったので、みな非常に恐がり

ました。殺人事件もよくありました。一家七人が一度に殺されたという新聞記事が出ると、臆病だった父は、女中のほかに屈強な書生までやとい、木刀を持たせて、毎晩家の周囲をまわらせました。沼袋あたりはまだ開けておらず、庭の池には蛙がたくさんおりました。その蛙が変な声でないので、出てみると、大きな蛇が蛙を半呑みにしているとありました。これには蛇きらいの母が、すっかり参ってしまいました。同じ敷地内に、家主の親戚で伊部さんという方が住んでいて、その次男の民夫君という子が、私より一つ年上でした。学校から帰ると、よく遊びに来てくれ、仲良しのお友達でした。その後の消息はわかりませんが、どうしているのでしょうか。

このような東京で、二年間治療をつづけたのですが、一向によくなりません。消費一方の生活が、このように見通しが立たないことには、そろそろ目処^{めど}をつけなければなりません。いよいよあきらめて、北海道に引きあげることになりました。

その直前、両親は雑司ヶ谷の東京盲学校を見に行っているのです。ところが建物は古いし、寄宿舎の設備は悪いし、こんな所へ眼の不自由な子とはとてもあずけておけない、という結論だったのですが、その後この学校は、わが国唯一の国立盲学校として大発展をしています。もし私があの時この学校に入っていたら、私の人生はまったく別のものになっていたかも知